スキーO
WOC2009へ
続く道

スキーO修行レポート その21

堀江守弘
渡辺 幸

スキーオリエンテーリングのワールドカップ・スイス大会を報告

中止から始まったスイス遠征

今回の遠征はマスターズとワールドカップが同時開催かつ、1月のレースということもありシーズンでいちばん最初のスキーOとなった。少しでも数をこなし、勘を取り戻そうということで、先発部隊 5 名が直前に行われるスイスの国内大会へ参加した。

チューリッヒのユースホステルを拠点に、電車を利用した日帰りでの参加を計画していた私たちは、当日の朝まだ夜が明ける前にユースを出発し、電車を乗り継いで 3 時間ほどで目的の駅に到着した。駅から大会会場までの交通を心配していたが、着いてびっくり！ 会場は駅の隣だった。

続々と参加者が集まる中、ウォーミングアップに行こうと思っていた矢先に大会中止の情報が飛び込んできた。トップスタートまであと一時間という時間にだ。そんなことはないだろうと、耳と自分の英語力を疑ったが、大雪のため中止を決断したそうだ。

雪？と言われれば確かに雪は降っているが、日本の豪雪地帯ではよくある光景だ。しかし、ここはスイスの山岳地帯。テレインを見下ろすように数千m級の山々がそびえたっている。このような場所では雪崩の危険が非常に高いらしい。

今から一時間後には周辺道路が全て封鎖されるという情報や、電車もどうなるかわからないという話まで飛び交い、我々日本チームは逃げるようにホームへと向かった。結局、一日早くスイス入りしたにも関わらず、トレーニングすらできずに一日が終わってしまった。

駅で電車の運行を不安げに待つ

翌日、ワールドカップ会場への移動にも電車を利用した。スイスといえば、アルプスを連想する人も多いと思うが車窓から見える景色はまさしくアルプス。日本では見ることのできない景色に圧倒された。大会期間中に滞在した街は小さいながらも歴史とヨーロッパの雰囲気があった。

天気に恵まれた一週間

今回の会場は、チューリッヒから電車で4時間のところにあり、左右を山々に囲まれた谷間の町だ。隣町、またその隣町とをつなぐようにクロスカントリーコースがあり、スキーヤーにとっては最高の環境がそこにはあった。

ワールドカップのテレインでは、過去にマスターズの世界選手権が開催され、その時は氷点下 20℃近くまで冷え込み凍傷になりかけたという話を聞いていた。そのため、天気については心配していたが、実際には大会期間中はずっと最高のスキー日和が続いた。

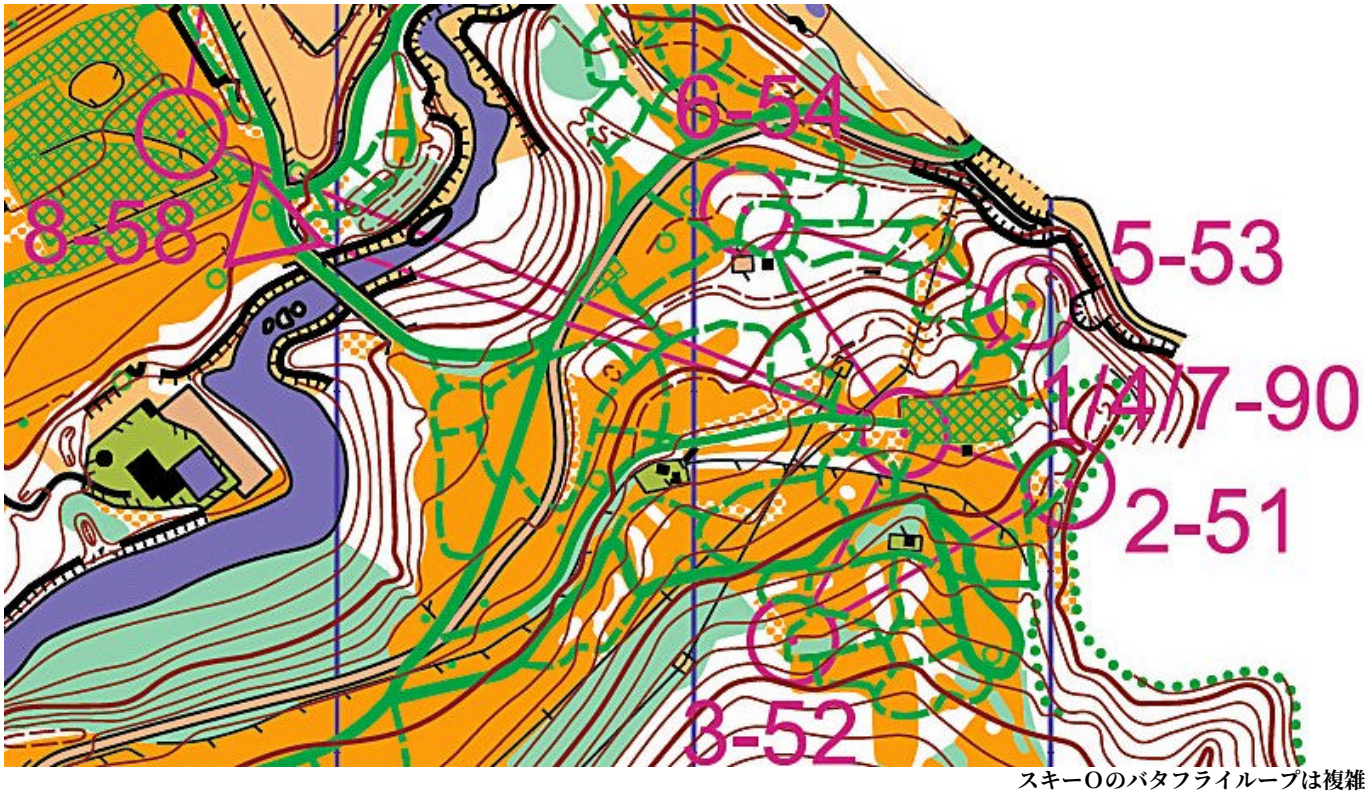
スプリント:

今シーズン最初のレースにしては、上々の滑り出し。37 位という順位はちょうど真ん中に位置し、中堅国のひしめくところだ。

ロング：

コントロール数が 47 個もある、非常に長丁場のレースだった。一斉スタートのこのレースではなんと１番コントロールからバタフライループが組み込まれていた。全く予想外の展開にびっくりしたというよりは、どこが１番コントロールなのか理解するのに時間がかかってしまった。

ロングディスタンスのマススタート



スキーOのバタフライループは複雑

また、幅の狭いナロートラックの割合が多いため、前半からダブルポールを多用していたのだが、中盤で突然太ももがけいれんしだした。少しペースを抑えるなどして後半は回復したが、上半身を最大限に活用する滑りの中でも、下半身の成す役割の大きさを再認識できた。やはりトレーニングは全身満遍なく行う必要があるということだろう。

最終的に優勝タイムが93分のところを私は 112 分かかってゴールした。最後は疲労困憊の状態だったが、ラスポゴールで前にいた選手に競り勝つことができた。こういう局面での勝負強さは大きな自信につながった。

急なナロートラックで転倒しないように慎重に滑降する堀江選手

ミドル：

長すぎず、短すぎない程よい距離であるミドルは、一見好成績を狙いやすそうだ。レースにも慣れてきたところで順位のアップを狙ったが毎度のことながらなかなか難しい。結果はスプリントと同じく37位という定位置だった。

リレー：

勢いよく会場を飛び出し、レース中盤まではトップ集団の見える位置につくことができた。しかし、苦しい局面でスピードを維持できず離されてしまった。最後はエストニアとの競り合いになったが、僅かの差で上回り２走にタッチした。

リレーチームの黒田、柴田、堀江選手

シーズン初レースがワールドカップということで、レース前は不安もあった。しかし、これまでの経験は自分の中にしっかりと蓄積されているようで、4 レースとも自分の滑りをすることができた。ただ、トップ選手との差は未だに顕著だ。目に見えるようなレベルアップをしなければ、上位争いに加わることは厳しいと思う。

ロング種目の翌日は、レースが休みだった。本来ならばトレーニングやワクシングをし、あとはのんびり身体を休める日だが、今回の遠征ではそれほどストイックにならず観光を楽しんだ。マスターズ組はスイスとイタリアを結ぶ登山電車ベルニナ急行での電車の旅。私、柴田さん、黒田さんの 3 人はケーブルカーとロープウェーを乗り継ぎ標高 3030m、スキー場の山頂にある展望レストランへ。その後、隣町にあるスパ（温泉）で疲れを癒した。このような体験ができるのも、海外遠征の魅力の一つだろう。

（堀江守弘　記）

■ぼくのスキーO修行■

米沢２中　２年　渡辺　幸

ボクは、いつもの年と同じように11月に北海道旭岳でスキーの初滑り合宿に参加した。小学校４年生から毎年参加しているからもう５年目だ。

今年は、ちょうど出発の日まで期末テストだったので、ボクが学校から帰宅するまで祖父と堀江さんは僕の家で待っていてくれた。

米沢を出発するときから雪が降ってきて、車が岩手県を走っているときに高速道路が通行止めになり八戸からのフェリーに乗れないことになり、祖父は青森に向かった。いつもの事だがボクの祖父はよく道を知っていると思います。

旭岳のクロカンスキーコースには今年も大勢練習に来ていた。全国からスキーで有名な大学生や高校生のトップクラスが来ているので滑っているフォームや練習方法がとても勉強になる。

高校生や大学生は朝起きてすぐに、決まってウォーキングをして体操をしている。夜も遅くまで勉強しているし、スキーの練習だけでないので大変だと思いました。

初すべり合宿のためボクは３日間学校を休んだ。

３学期が始まってすぐスイスのスキーO大会に参加した。小６のときにスウェーデンのモーラにスキー合宿に行ったので２回目のヨーロッパだ。今度はワールドカップやマスターズ大会に参加する人たちと一緒なので全員で８名になった。

チューリッヒについて次の日、練習大会に参加するため登山鉄道でレアルプという所に行ったが、折角着いたと思ったら大雪で大会が中止になった。

会場に立てた日の丸と幸、高原、弘中

開会式は14日夜、寒いのに外で行なわれた。入場行進でボクは黒田さんと二人で日の丸の国旗を持って行進した。

周りにかがり火を焚いてブラスバンドが吹奏され、日中に行なわれたスプリントレースの表彰式も行なわれた。

式の挨拶はいやに永いと思ったら、言葉を英語、ドイツ語、フランス語の３ヶ国語でスピーチしていると判った。

スイスは永久中立国だし、いろんな国の人たちの集まっている国なんだなぁと改めて思いました。

小さな町なのに観客も集まってとても幻想的な開会式だった。開会式が終わった後、祖父が数人の女の子たちと話していた。いつものように日本語だが彼女たちはなにやら喜んでいるようだ。次の日になってわかったことだが会場に彼女たちが応援に現われたのだ。

ボクは日本語オンリーの祖父なのに堂々と国際交流している爺々のその魔術におどろいた。

そう云えば、同じホテルに泊っているフィンランドのお爺さんも祖父にフォトフォトと言って一緒に写真を撮っていた。アメリカのおばさんやスウェーデンのおじさんとはお互いに抱き合って挨拶していたし、爺々はスキー以外にこんな交流が好きで毎年マスターズに来ているのかもしれないと思った。

応援に来た少女たちと記念写真

大会では、ボクと同じ年齢のクラスがあったのは１度だけでそのクラスでボクは１位になったが、他は全部大人のクラスに参加したが、大きなミスもしなかったので大体が参加した人数の真ん中ぐらいに順位が着いていた。

最後の日のリレーではボクが１走だったのでマスターズの爺々と一緒に走ったが、爺々は途中から見えなくなってしまった。

帰国の前の日は、首都で世界遺産のベルンにも行けたし、本場のチーズフォンジュも食べれたし、スキーO以外に社会修行が出来たことが良かった。

（渡辺 幸　記）

（編集と一部写真提供　武石雄市）